美術教育試論ⅩⅢ

― 造形遊びについて ―

An Essay on Art Education ⅩⅢ

― About “Zoukei–Asobi” ―

清　原　知　二*

Abstract

We think “Zoukei–Asobi” is very important education for arts and crafts. However, elementary school teachers do not educate “Zoukei–Asobi”.

We think that there are two causes. One who was well acquainted with “Zoukei–Asobi” was immersed in the research and did not convey the contents to other teachers. It is the same for Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology–Japan.

Another reason is that contents and evaluation are difficult to understand and we think that it was because most teachers had never experienced “Zoukei–Asobi”. We think that “Zoukei–Asobi” can not be done without experience. We are concerned that “Zoukei–Asobi” will disappear from the above situation.

キーワード：造形遊び、造形的あそび、Do の会

Ⅰ　はじめに

今回の論文は「造形遊び」（後述では「　」を取る）について書きたい。なぜ造形遊びであるのか説明から始める必要がある。始（初）めた人物から書く。

板良敷敏（イタラシキサトシ）[1]が研究科卒業後アメリカで現代美術の研究のために渡航、帰国し大阪教育大学附属平野小学校（後述では平野小学校と記す）に赴任した。筆者が学生の頃にはすでに平野小学校の教官であった。その頃には平野小学校は日本の造形遊びの中心的存在になっており、平野小学校に教育実習に行った同期の友人たちは非常に大きな影響を受けて帰ってきた。筆者は母校での教育実習であったが、担当教諭が休みでクラスを完全に任された時があり、紙テープを使った造形遊びを行った。たまたま 8 mm カメラを持ってきて撮影しており、指導教官であった花篤實（ケイトクミノル）[2]に教育実習後見せたところ造形遊びの原型のようなものであったので非常に驚かれていたことを記憶している。筆者は既に大学院美術教育専攻の試験に合格していたので、大学院でも花篤の指導を受けることが決まっていた。（当時美術教育の大学院は全国で東京学芸大学と大阪教育大学 2 校しかなく、先輩、同期生は他大学、現職教員を辞めた者で構成されていた。定員は 6 名である。）

筆者が大学院 2 回生の時、すでに大阪教育大学美術科卒業生を中心にした造形遊びを研究する「Do の会」（後述では「　」を取る）が活動しており末席の会員に入会を許された。その後会に参加するとともに、教科教育の研究をするには小学校での教育経験が是非とも必要であるとの花篤のアドバイスによって、大阪府の公立小学校採用試験を受験し小学校教諭になった。赴任してからも Do の会に参加することは忘れなかった。そこで聞いた話では Do の会とは元々は板良敷の同期生の親睦団体でいろいろなことをしてみようという会で、田植え経験、専門家を呼んでの釣りの毛針制作など自分たちの楽しみ（行為）のための親睦会のようなものが始まりのようであった。1979年に万博跡地で国際児童年記念・

* Tomoji KIYOHARA　関西学院大学教育学部教授

1）元大阪教育大学附属平野小学校教官、日本で初めて造形遊びを考案・実践した。長崎大学をへて文部科学省図画工作科教科調査官に就任。後視学官。2005年退官（不確定）。

2）大阪教育大学名誉教授

大阪府子どもフェア・Doの会企画「造形の広場」いう大がかりなイベントをしたようであった。板良敷の同期生でない岩﨑由起夫[3]もいた。参加するうちに理解できてきたのは、「子どもにとって大切な美術教育の力とはなにか」「材料を元に行為（遊び）ながら作る造形こそ子どもにとって大切である」ということである。

当時は絵画教育が盛んで、大阪発で全国に広がった「一本線描法」、また絵画コンクールを意識したような非常に丁寧で細やかな描写である。これらは小学生のみならず、幼児の造形教育も同じようなものであったと記憶している。

これらの状況の中で造形遊びがどのように発展し、小学校学習指導要領図画工作科に取り上げられ、指導項目の最初に記載されるまでになったのかという過程も辿りたい。その後の図画工作科に目に見える変化が生じたのかなども検証する。造形遊びの初期の経緯をささやかながら支え、その後外部からみていた人間として覚え書きのようになってしまうが書き残す必要を感じて筆を執ることにした。

Ⅱ　Doの会とＦ部会

１．Doの会

筆者がDoの会に加入したのは先に書いたように大学院の２回生の時であった。花篤から発足は板良敷の同期生の趣味の会からの出発であることは聞いていたが、それから既に10年ほど経てからの加入である。大阪教育大学美術科卒業生中心の会であり、話の内容は既に造形遊びのことに移っていた。Doの会に所属していたものの、学生時代に教員免許を持っていたので、板良敷が務める大阪教育大学附属平野小学校ではなく、花篤から同附属天王寺小学校で図工専科非常勤を週２日務めるよう言われた。

当時の天王寺小学校（以下附属略）は非常に美術教育に力を入れていて図画工作科を基本的に専門にする教員が３名おり担任ももたれていたので、その穴を埋める形の雇用であった。そのため内２名の指導を受ける形をとっていた。独自の教材を教えるのではなく、指導された教材を小学生に教える形である。

天王寺小学校は元大阪第一師範学校の附属校であり、大阪の民間美術教育団体中で一番力を持っていた大阪児童美術研究会の本部もあり、毎年２月初旬日曜日であると記憶するが、大阪児童美術研究会が開催され非常に多くの参会者を迎えて、各部会の研究成果が披露されていたと記憶している。Doの会の会員であったけれども、院生であったので大阪児童美術研究会準会員のような立場になった。これは特殊なことでは無く、Doの会の会員も大阪児童美術研究会会員を兼ねており附属平野小の関係者は、平野小学校が大阪第一師範学校とつながる元大阪女子師範学校であったので、天王寺小学校の下に位置する関係であるような話を天王寺小学校の教官から聞いたことがある。

Doの会のメンバーは10人ほどの会であったがマテリアル・ワーク、チルドレン・スケールなど話し合われており、はじめは何のことか理解するのに苦労した。メンバーの多くは団塊世代で現代アートに興味をもっており、実際に現代アート作家としていろいろな場で展示やパフォーマンスをしていた経験を持っていた。しかし加入時には作家活動は辞めており、それぞれが学校関係者になっていた。筆者は造形遊びには興味はあったが、現代アートには特に興味はなかった。後輩もDoの会に加入していくのであるが、加入の経緯は同様であったと考えている。

加入して５，６年目の時にDoの会で雑誌を発行しようという話がでた。先輩方は既に各方面でDoの会について投稿していたようで、板良敷、長町充家[4]は教育美術の佐武賞[5]佳作受賞者であった。相談の結果文字媒体でなく、写真集を作ることに決定

3）当時平野小学校教官、副校長へて大阪教育大学教授（夜間部教授、附属天王寺小学校校長兼務、日本教育美術連盟代表理事、2009年８月死去）

4）専攻科卒業後、日本の美術教育の論理的基礎の一つとなった「美術による人間―創造的発達と精神的成長」を著したヴィクター・ローウェンフェルドが主任教授をしていたペンシルベニア州立大学大学院修了後、当時大阪教育大学附属中学校の美術科教官。筆者は学生時代に実習で指導を受けた。Doの会加入当時は本物を作るという題材で、食品サンプルや寒天で型を取り、蝋を流し込んだものに着色するというような授業を行っていた。後大阪教育大学美術学科教授。

5）美術教育専門誌「教育美術」（現在は同名公益財団法人、筆者は同法人評議員）の美術教育の公募論文部門。「佐武」の名の由来は「教育美術」の初代編集長で名編集の評価が高く、「教育美術」の基礎を築いた佐武林蔵から取っている。没後その名を冠した賞がつくられた。この会は戦前から続く全国教育美術展（日本最大の幼児、児童、生徒の絵画コンクール、筆者は現在全国審査員）を現在も主催している。当時は「美育文化」という同様の専門誌があり両立していた。特に外国の子どもの作品の紹介に評価があり、「教育美術」同様愛読者が多かったと考えている。現

した。写真集なら手伝いをつけるくらいでいいとの判断で当時短期大学に籍が移動していた筆者が編集手伝いに入った。責任者は辻正宏[6]である。雑誌名は「ACTING」で長町の提案であった。Do の会の宣言文を最初に記載し、次に発起人板良敷とまで普通であるが、最初から面倒をみて先輩たちとも行動を共にしていた花篤は長町の前と通常考えられる構成なっていた。他の執筆者の記載順序に規則性がなく、なぜこのようになったか今では不明である。また写真集を作ると記憶していたが、文字の説明も多くあり、花篤は文字のみである。花篤は Do の会の会員ではなく、保護者のような立場であったので寄稿を依頼したものであると考えられる。それにしても常識的ではない雑誌で、当時の会員の造形遊びに対する考えを好き勝手に集めたもののような内容である。装丁、編集等は辻が担当し、記憶に薄いが誤植の手伝いをしたものと思われる。発行年度の記載忘れの不備を発見出来なかった。所属学校から判断すると1984～86年間であると考えられる。この編集作業を通して Do の会にも宣言文があり。理念がしっかりしていること、また花篤の文章からは、この会の成り立ちと果たしてきた意味を知ることができた。写真集とはいえ編集手伝いをさせてくれた先輩たちに感謝したことを覚えている。

Do の会の宣言文は次のようなものであった。

「美術教育は子どもを行為に駆り立てることである。造形活動は行為に発し、行為に終わる。色や形による表現は、今日風化しているといえる。

美術教育は、現実に立ち向かう力を培うことであり、色や形で子どもを縛るのでは無く、行為するエネルギーをコントロールすることができる力を獲得させることである。それは机からの解放を意味し、「環境」や「もの」に目を向けさせることである。

美術教育は、明日に役に立たない教育である。活動の無目的、色や形に対する無制限、従来の絵画観に対する無価値・無意味なもののなかに子どもの興味、関心を見いだすことである。

我々は、指導者であるよりも時間・空間・場・素材の提供者でありたい。」[7]

今読んでみても造形遊びの本質を示している。その一方で「従来の絵画観に対する無価値・無意味なもののなか」という表現は、真っ向から多くの学校現場の美術教育を否定しているといえる。この点について花篤は同誌への寄稿分「ZOO～DO～ZU―“DO„ 歩んできた20年の意味―」の中で「今日では当たり前になっている小学校や中学校の隠し絵やだまし絵、コピーといった視覚に関わるあそび教材、現在では造形遊びという名で堂々と学習指導要領の中に正当な位置を取り初めた空間への関わり、材料・操作への関わり。触覚に関わる教材等々と一緒に、こうした直接心象表現（イメージによる色や形の具象化、形象化）に結びつかないいろいろな教材が、今日珍しくない、あたりまえの教材として、幼児や子どもの教材の中にも日常的に定着したことに、万感の想いをはせるものだからである。」[8]という言葉の中に「宣言文」の思いが集約されているように感じる。

2．F 部会

当時は絵画教育が非常に盛んな時期で、大阪児童美術研究会が開発した「一本線描法」が大阪、関西にとどまらず全国的に普及しているような状況があったようである。「一本線描法」とは、よく見て対象の輪郭線をゆっくり描き、消さない、途切れさせないとい描法で、筆者も小学生の時に経験している。体験からいうと材料ははしペンと墨汁、マーカーを使い。対象は静物や人物であったと記憶している。

筆者は大学院終了後、教科教育を研究するにしても小学校現場を経験すべきであるとの花篤の勧めで大阪の豊能地区の小学校に勤めた。同時に大阪児童美術研究会にも所属することになった。

会自体のことは全く分からなかったが A から F 部会まであり、他の部会内容は全く検討せず、Do の会のメンバーが F 部会に所属していたので、当然の成り行きで F 部会に所属した。部会で造形遊びの実践例などや理論的な話を聞いていた。後から聞いた話ではこの「一本線描法」的伝統的な描画中心の風潮に嫌気がさしていた会員が学生時代に現代美術に傾倒し、学校関係者になった後 F 部会に所属していたようである。そのような経緯から Do の会＝ F 部会のような風潮が残っていたように思う。

在隔月出版となっているが、当時は両方に原稿を書くのは通常のことであったようである。
6）当時幼児造形分野の活動家。多数の幼稚園を指導。1997年死去（死去年不確定）
7）Do の会発行「ACTING」1984～86頃（不明）p. 1
8）前掲書　p. 27

加入２年目であったと思うが大会で研究発表をする機会をいただいた。まだガリ版刷りの時代で指導案とスライドを用意して発表に臨んだ。資料を紛失してしまい詳しいことはいえないが、小学校で行なった造形遊びについて発表したと思う。駆け出しであったが板良敷に非常に褒められたのを記憶している。

先に Do の会＝F 部会であると書いた。また Do の会の発足は板良敷の同期生の趣味の会からの出発であるとも書いた。このメンバーが筆者の務める学校を訪問してくれることになった。今から考えれば多分に趣味的でどんなところか見てやろうというメンバーの好奇心からの発想であったと思う。こちらは先輩方を迎えるということで緊張をもって望んだ。今まで行った造形遊びのスライドや資料を用意したり、飲み物等を用意したり緊張して望んだ。小さな学校で学年１クラスしかなく、人間関係の広がりもなく、保育所からの人間関係を引きずっているようで、最初はこのような学校が大阪府に存在するのかとびっくりしたものである。

一行が来られて、気遣いを行いながら接待した。田舎の学校であったので、メンバーは遠足気分のように見えたが、大先輩との思いが強く、嬉しくもあったが、緊張の方が強かったと記憶している。恐る恐る作品を見てもらった。造形遊びしか頭になく赴任し、２，３年生持ち上がりの学級であったので、理科、社会などは「合科授業」の形にして、ほぼ図画工作の授業に変えて授業を行っていた。見てもらった授業の内「島めぐり」という授業が非常に評価されて後に出版される「造形遊び指導と展開のポイント」という本で作品貸し出しということで平野小学校に持って帰られた。このことについては、作品説明とともに再度触れたと思う。

Ⅲ　「造形的あそび」の登場

「造形的あそび」（後述では「　」を取る）は、平野小学校の板良敷等の文部教官から当時の文部省に働きかけがあって実現したものであると思い込んでいた。公立小学校赴任後豊能地区教育委員会から造形的あそびについて講演を頼まれたことを考えると既に指導要領の中に記載されていたことになる。そのため上記の「思い込み」を訂正する必要が出てきた。

造形的遊びは昭和52（1977）年に発表された図画工作科学習指導要領に掲載されたのが最初であった。当時の図画工作科の教科調査官は樋口敏生である。また、この図画工作科学習指導要領には平野の附属小学校関係者や Do の会メンバーは関わっておらず、民間美術教育団体の「造形教育センター」（後述では「　」を取る）がかなり影響を与えていることが分かった。[9)]

「文部省は昭和42（1967）年。中央教育審議会に『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策』について諮問した。昭和46（1971）年に答申が出された。この答申は前文で明治初年、第二次世界大戦後に次ぐ第三の教育改革であるとし、学校教育全般にわたる改革整備の施策を提言している。」[10)]

この年は大阪万博の次の年であり、高度成長期の頂点の時でもある。まだ日本は経済的にも成長すると考えていたし、生活の充実など目に見えて生活が変わっていく感じを受けていた。一方ではニクソンショックで変動相場制になり、円が200円台に突入する。これも世界的には非常に大きな問題であったと思うが、輸入品安など庶民の感覚では歓迎すべき現象が多かったように思う。

答申では「価値観の多様化に応じた転換が図られ（中略）人間尊重の精神に基づいた『ゆとりと充実』の教育へと展開していったと言えよう。」[11)]

図画工作科の改訂作業は，答申を待たず「中間まとめ」が出された時点で着手されていたようである。

○図画工作，美術，芸術（美術，工芸）

（ア）　小学校、中学校及び高等学校を通じて、充実した表現製作の喜びを一層深く味わわせることに重点を置くとともに、実際の指導において有機的・統合的な指導が行われやすいように配慮しながら領域区分を整理統合などして内容を精選する。

（イ）　ア小学校及び中学校については、現行の「絵画」、「彫塑」、「デザイン」、「工作（工芸）」、及び「鑑賞」の領域区分を、三領域程度に

9）武藤智子・金子一夫 「造形遊び」の発生についての歴史的研究（１）―教育課程の改善，及び造形教育センター―茨城大学教育学部紀要（教育科学）53号　2004　27-50　に詳細な記述がある。
10）前掲書 p. 31
11）前掲書 p. 32

整理統合方向で検討する。

イ小学校及び中学校の造形材料や用具・技法等の取り扱いについては、児童生徒の発達段階を考慮して内容を検討し、精選する。[12]

とある。その意味で次の指導要領の方向性は示されていたと考えられる。ここに関わってくるのが、造形教育センターである。その点についてはまったく知らず、今回引用させていただいている武藤・金子論文で初めて知った。創立は昭和30（1955）年であり、当時多くの教師に支持を得ていた「創造美育協会」や「新しい絵の会」、「日本版画協会」等戦後早くから活動した民間美術教育団体ではないが、デザイン分野を日本の美術教育に紹介した意味で大きな意味をもった存在である。後発ではあるがデザインを扱っていることなど、他の団体に比べて非常にモダンな団体の印象を持っている。

「創立当初から現在に至るまで図画工作科学習指導要領の作成協力委員や教科調査官を多数輩出した。昭和52年改定時の教科調査官であった樋口敏生（1928～）や図画工作科学習指導要領作成協力者会議の主査であった高山正喜久（1918～）も会員であった。また、作成協力委員には多くのセンター関係者が含まれていた。このようなことから、造形遊びの導入も造形教育センターの意向と無縁ではなかったと考えられる。」[13]このようなことから、造形教育センター主導の形をとるのであるが、「昭和33（1958）年の造形教育センターでは四部構成のその第一部を『教育の芽ばえ』とし、1．いたずら・遊び、2．写真解説、3．遊び用具という三つの柱を設けている。」[14]この「教育の芽ばえ」という発達段階を考慮した内容に変えたことから造形的あそび実現に多く力を注いだと考えられる。

「造形的あそびは既にふれたように入学時の図画工作科のオリエンテーション的なものとして、造形活動への積極性を育てること、創造的な造形活動の基礎としての材料との対話、想像力の育成のなど様々なものがこれらの遊びの中で芽ばえることを願って設定されたといってよい。」[15]

また当時の図画工作科調査官である樋口敏生も次のように述べている。

「A 表現の（1）は低学年での特色と言うべき内容である。これは、作品製作というよりも、材料を手にして発想したり、使って遊んだり，作ったりする、活動そのもの、作る過程に意味を認め、造形の楽しさを存分に体験させてやろうとする意図からもうけられた柱である。幼稚園から小学校に入学して急に、題材主義、作品結果主義的な指導になるきらいがあるという、いわゆる幼小の段差解消の意図もこれにかけられているといってよい。」[16]

また、板良敷の前任の教科調査官である西野範夫は「造形的遊び」とデザイン活動との関係を重視し、指導要領で追加された部分はデザイン部門が担当していた部分であると指摘している。[17] 造形教育センターの指導要領参与の傍証になると思われる。参考にしている武藤・金子論文では審議会では、造形的あそび実現に多く力を注いだ経緯も詳しく検証しているが、拙論の目的から引用を控えた。

論文中で幼小の連携、あるいは幼稚園の義務教育化もかなり話された経緯が記載されている。私見ではあるが、当時はまだ多くの公立幼稚園があり、保育も１年が通常であったと思う。しかしながら私立の幼稚園も戦後急速な勢いで増えており、私学を含めた義務強化は無理であったと思われる。ただ、幼稚園とのつながりを重視していたことは確かで、学習指導要領公示後、文部省から出される小学校学習指導要領解説の中にこの冊子のみ幼稚園教育要領を収録されていることもその現れの一つであると考えてよいだろう。

また文部省は昭和42（1967）年に中央教育審議会

12）前掲書　p. 36　この部分については論文のページは示せるものの、美育文化協会編「美術教育のすべて」造形社1971より筆者がまとめ抜き書きしたものと思われる。
13）前掲書　p. 38
14）前掲書　p. 41
15）武藤智子・金子一夫「造形遊び」の発生についての歴史的研究（２）―昭和52年発表図画工作科学習指導要領の編成作業―　茨城大学教育学部紀要（教育科学）53号　2004　51-68　上記論文 p. 55からの引用である。元資料は高山正喜久「新学習指導要領における造形的な遊びについて」美育文化第27巻12号　1977　25-28頁となっている。
16）前掲書　p. 55からの引用である。元資料は樋口敏生「新教育課程口座（５）図画工作科改定の要点」 初等教育資料第355号　1977　45-48となっている。引用文「A 表現の（1）」に武藤・金子の（筆者註「造形的あそび」のこと）は引用から外した。
17）前掲書　p. 60からの引用を参考にまとめたものである。元資料は西野範夫「デザイン領域と工作領域の統合の意義」皇學館大学紀要　第21輯　1972年18-54頁　この頃西野は造形教育センターの事務局長の任にあった。当然指導要領作成協力委員であり、立場上リードしていく立場であったと想像している。

に今後の教育について諮問し昭和46年に答申が出て「ゆとりと充実」方向性が示される。また昭和48年にも教育課程改善の諮問を行っており、50年に「中間まとめ」が出て、その時点で造形教育センターは検討に入っている。51年に「審議のまとめ」同年答申が出されている。この早さは戦後日本からの離脱と高度成長と無縁で無いと筆者はとらえている。

以上ことから最初の造形的あそびはDoの会やＦ部会関係者が同様な活動をしていたが、諮問した1967年頃はDoの会やＦ部会関係者はまだ学生か現代美術の実験をしている最中であり、造形的あそびが初めて記載された昭和52（1977）年の図画工作科学習指導要領作成と関係が無いことが分かった。

しかしながら、同時並行的に平野小学校で板良敷が造形遊びを発案・実践していたことを付け加えておきたいと思う。

Ⅳ　大阪教育大学教育部附属平野小学校での造形遊び

1970年代の平野小学校には図画工作科担当の教官として辻田嘉邦[18]、板良敷、岩﨑が在籍していた。当時同校は「教育の現代化」研究の文部省指定校であり、辻田はそれらのまとめ役をしていたらしい。

筆者と辻田の出会いは「幼児造形高野山集会」（後述では「　」を取る）である。1977年の夏期休暇の時で花篤ゼミ所属であったため、見学を勧められて幼児造形高野山集会に同伴させてもらった。三泊四日の研修であったが、参加者が多いために、数カ所の宿坊に分かれ研修をしていおり辻田が責任者をしていた宿坊に配置された。食事の時に園の紹介などがあり、辻田の意向で司会進行を務めて褒めていただいたのが初めての出会いである。

その後、幼児造形高野山集会運営委員になり、辻田、板良敷、岩﨑もメンバーに入っていた。それは絵画教育盛んな地で活躍した辻田が平野小学校の図画工作科の方向性は造形遊びであるということを容認したことを示している。花篤が筆者に辻田が認めたからこそ平野小学校が、日本の造形遊び実践の中心になったといったことを今も思い出す。

1985年に平野小学校から図画工作科の研究協力員就任の要請があり正式に研究協力員になった。学期に一度ほど研究授業があり、その授業について意見を具申するのが役割であった。Doの会やＦ部会関係者以外に府内の図画工作科の研究をおこなっている先生も何人かおり、初対面の先生も多く最年少で意見に耳を傾けることがはじめの仕事のようになった。

図画工作科の方針は、まず「ものにいどむ」というのが最初の印象であった。これだけ色々な材料が、それもふんだんにあるという印象であった。準備室はものでふくれかえっていた。それと授業を受ける子どもたちのわくわくしている気持ちが伝わってきた。これは「ものにいどむ」ための最初の動機になる大切な意識である。

授業はまず教官が材料を示しながら、「この材料で○○を今日は作ります。」という一般的な説明から始まるが若干の例を見せることもあったが、作り方についての指示はほとんどない。驚いたのは副材料の多さである。いちいち説明はしないが子どもたちは慣れている様子で使用していた。これは通常の小学校ではこれは無理だろうなと思った。しかし現在振り返ってみると副教材はそんなに高価なものではなかったような気がする。つまり教官は子どもたちの発想の方向を予想して教材ごとに副教材を用意したものだと考えることができる。

それにしてもこれだけよく教材を考え出すものだと思った。Doの会やＦ部会から既に造形遊びは始まっており、試行錯誤があったとしても平野小学校はすごいところだと感心した。辻田が抜けた後、今西栄[19]が教官として入った。辻田が平野小学校を出た後になるが辻田、板良敷、岩﨑、今西で「造形遊び指導と展開のポイント」（日本文教出版社 1982）を出版する。Ⅱ章の最後に書いたようにこの本に作品提供と言う形で筆者の指導作品が使用されてい

18）辻田は元々大阪学芸大学国語科出身であったが、生地が大阪でも図画工作科教育の盛んな泉大津出身であった。平野小学校への移籍の経緯は知らないが、大阪府の一都市である泉大津市は西日本大会（現在の日本美術教育連盟の前身）の全国大会を開いて成功を収めるほど幼児の造形から小中学校まで含めて美術教育に熱心であった。一本線描法は行わないが絵画中心の教育であり、非常に良く観察させ、時間をかけて描き込むことに主眼をおいたものであったとの印象がある。当時は絵画教育が非常に盛んであり、辻田自身も教育美術への投稿や多くの児童画コンクールで賞を受賞する者を指導していたようである。ちなみに花篤は阪学芸大学同期である。後大阪市教育委員会へて兵庫教育大学教授。

19）大阪北河内地区の小学校から平野小学校に赴任。退官後北河内地区に戻り小学校校長を務めた後、大阪国際大学教授に就任。一学年違うが、学部の時美術科主催のスキーなども一緒に行った経験がある。研究協力員就任後授業を参観して岩﨑が目を付けただけあると思った。

る。この作品は元々公立小学校赴任時代の作品で、題材名は「島めぐり」という。教室に近い大きさの紙を模造紙で作り。最初は足形の島を作ろうということで絵の具を使用して島を描いていく、その後一人ずつに船の軌跡を描くためのマーカーを渡し、すべての島を外から巡る旅に出発する。当然子どもたちは島作り最初から重なるように動き、旅に出発するとマーカーは絵の具より早く描けるので、もっと重なるように行動する。線は何重にも重なり見事な作品が完成した。自分でもうまく指導できたと思った。それが、Do の会やＦ部会のメンバーが赴任校を訪れた時に目にとまり平野小学校に貸し出した。(この経緯は先にも述べた)[20]いずれにせよ初めて本に掲載されたことに喜び，使用してくれた四人に感謝したことを覚えている。今見ても古い感じは受けないが、それは造形遊びの普及の問題とも関係していることを指摘することにもなっていると感じている。

今西の話にもどるが研究協力員の授業参観のとき「三角形を隠す」という授業を見た。四つ切りの紙を横半分に折った三角形であるが、それを教室の中に隠すという授業である。「隠す」がみそで丸めたり、突っ込んだりするのではなく、この三角形を縦横好きなように使い、教室に溶け込ませる。そのために紙で隠れた部分を再現して「隠す」のである。若干用具なれがいるので高学年の授業であったと思う。子どもたちは必死になって下地の再現を試みていた。すごい動機付けだと驚いてしまった。子どもたちは必死になって下地の再現を試み、めくって写す者、机を近づけ描く者、子どもたちは何度も絵を下地に持って行き違いを確かめる。壁だけ描いても大変だと思うのに、木材から紙に移る部分や段差のある部分など、子どもの気に入った部分の再現である。子どもからもなんとかしてやるという気迫が伝わってくる。

このような授業参観後、平野小学校の三人と研究協力員との意見交換がおこなわれるのであるが、よく耳にした意見は「附属だからできる」というものであったと記憶している。根拠はまずは材料購入費が潤沢にあること。子どもが受験して入ってきており既に普通学校とは違い問題児等がいなく生活指導の必要が無い。つまり教師の指示をよく理解できる。ということにあったと思う。多くの部分はその通りであるかもしれないが、上記の今西の実践のように特に附属であるからという指摘が当たらないものもあったと思うし、材料についても附属近辺から無償で教官自ら集めてきたものもあった。

毎年でなかったと思うが全国に成果を披露する会が催されていて、造形遊びの実践の中心は平野小学校であるという証明で、非常に多くの参観者がつめかけていた。バスを仕立ててきたところも目にした。そのような光景を見ていたものであるかもしれないが、造形遊びは全国的に行われていると思っていた。それは図画工作科学習指導要領の内容が全国的理解され、実際の授業を参観することによって小学校の図画工作科に根付く過程のように見えた。

Ⅴ　図画工作科学習指導要領の中での造形遊びと小学校図画工作科の実態

造形的遊びは昭和52（1977）年に発表された図画工作科学習指導要領に掲載されたのが最初であった。造形教育センターの貢献、平野小学校の実践についても触れた。しかしながら、幼小の連携が前に出ていて幼稚園から小学校に上がった時、教科の枠組みのない幼稚園と教科としての図画工作科は幼稚園同様の造形活動が出来るという意味合いが強かったように思う。成長発達を考慮して低学年・中学年・高学年の３部構成にしたようである。

平成元（1989）年の改定では造形的あそびの呼称が造形遊びに改称され、「材料を元にした造形活動」（造形遊び）が中学年までが対象になった。「材料を元にした造形活動」の割合が増えている。

平成10（1998）年改訂では「材料を元にした造形活動」（造形遊び）が高学年まで拡大した。「つくり出す喜びを味わうようにする」という位置づけから、「遊び性を生かした学習活動」と明確に定義しており、造形的あそびの意味を提示している。

平成20（2008）年にはやっと「造形遊び」と明記されるに至った。同時に刊行された学習指導要領解説図画工作編においては、低・中・高各学年のＡ表現の（１）に「材料を基に造形遊びをする活動を通して、次の事項を指導する。」という文言が入った。昭和52（1977）年に「造形的あそび」が導入されてから実に31年の年月を経ている。文部省は昭和

20）この画像は拙著「幼小の連携の観点から　造形的あそびの意義について」教育美術　2015 may. 875 5 特集 造形遊び　p.34-37　にカラーで収録されている。

42（1967）年の中央教育審議会への諮問、造形教育センターの協力、平野小学校の実践などを入れると50年以上になるかもしれない。

この50年は非常に長い期間である。造形的あそびが導入された時期は高度成長がまだ続き、将来に対する日本の成長に対する良い変化を疑わなかったし、教育の分野でもそれは同じ感じを持っていたとも思う。途中オイルショックなどあったが基本的には変わらなかったという実感もある。小学校教員になる人間が教育系大学以外や短期大学からも入って来たが、まだ教育系大学も危機感を持っておらず、共通一次テストもなかった。筆者は大学院卒業後公立の小学校の教諭になったが教員の「人材確保法」によって非常に早い速度で昇給した。この時にはDoの会やＦ部会、その後短期大学に移籍して平野小学校の研究協力員になったが、周りに経済的に心配する人はいなかった様に思う。辻田や板良敷が平野小学校を出た後も状況は変わらなかった。しかしながら、ここに造形遊びの落とし穴があったと思う。先にも述べたが公立小学校赴任後豊能地区教育委員会から「造形的あそび」について講演を頼まれたことがあった。この時期は昭和52（1977）年の学習指導要領が使われていた時期で、講演をするといいうことは一般の小学校では造形遊びをしていなかったことになる。確かに二校赴任したが造形遊びをしていたのを見たことがない。つまり造形的あそびは成立していたが実際は行われなかったことを意味している。

造形遊び自らが子どもの基本的造形行為を選んだことも一つの原因であると考えている。並べたり、つないだり、積んだりする全身的造形活動自体を大切にする。周囲の環境にあるものや場所に積極的に関わり、そこでの造形活動を楽しむ。等々である。これらはすべて遊びの延長であり、これらの行為が美術教育の基本となることが、造形遊びを理解している者にはわかりやすく確信をもてる。しかしながら一般の教員からすれば幼児の遊びの中で通常行われているものであって、今更小学校の図画工作科ですべきであるか疑問に思ったと考える。またどのような授業を展開するのか。評価の基準はなにを尺度にするのか等、全く考えられないことを教えなければならないと考えたと思う。Doの会やＦ部会また平野小学校は既に多くの教材を開発しており、文部科学省の図画工作科担当者も様々な図画工作科の研究会で全国を飛び回っていたので、そこで見たり、自らも実践したりしており、図画工作科の専門家であるから造形遊びの有用性を理解している者である。つまり実際に一般学校で行われているかという検証はできなかったと考えられる。また造形的あそびを広げる手立てをしなかったとも思う。上記のことなどから一般の小学校では造形遊びは広がらなかったと考えられる。

もう一点筆者が大切なことだと思うのは、教師自身が造形遊びを経験していない点である。拙論でも触れたが[21]長年造形遊びに関わってきたが造形的あそびの２度目の講演の依頼が2015年に神戸の図工研究会からあった。最初の講演が公立小学校赴任2年目であったので実に33年目のことになる。講演だけではなく実際に蜘蛛の巣作りという簡単な実技もおこなった。若い会員は楽しく紙テープを投げたりして遊んで楽しんでいたが、ベテランの教師は周りを取り囲んで、なにをしているのか観察をするばかりで参加はしなかった。一度の簡単な経験であるが、この経験をもとに継続しくれる教師が出ることを願った。

筆者は小学校実習のために授業案の指導をおこなっている。今回は無理があるとは考えたが造形遊びの授業案を書かせて発表させることにした。適当な見本がないので筆者が中心に作った教育美術の特集造形遊びから取ることにした[22]この部分の写真を抜いたものを切り貼りして学生に渡した。発表をさせてみると実に面白い材料を使っていた、前年度に図画工作科教育法で造形遊びの解説や簡単な造形遊び経験をさせていたが、やはり若いと発想がちがう。身近なもので結構造形遊びらしき指導案を書いてきた。これには私も驚いてしまった。

Ⅵ　まとめ

造形遊びは子どもにとって非常に有用な活動であることは間違いない。しかしながら、「ゆとりの教

21）前掲書　p. 35
22）前掲書　p. 38-42　ここでの授業者は大阪教育大学の二部を出ており、専門は国語教育らしいが、たまたま行った実習視察で実習生が美術室にいると聞いて案内していただいた。そこで行われていたのが造形遊びで、後から時間を取ってもらう約束をした。話によると二部での岩﨑の授業に感動し、卒業後美術専科に転向したとの話であった。

育」の中で発展してきた。現在の文部科学省は「ゆとりの教育」反省からか、主要科目の時間数を増やした。なおかつ英語教育が入り、道徳教育も正式教科になった。まだ模索しているがセンター試験に記述式の問題を入れようとしている。これは OECD（経済協力開発機構）の PISA（Programme for International student assessment）での調査に読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの調査あり、先進国中日本は下位の方に属していたためである。その結果、各科目で文章化の促進が行われ、グループ学習も多く、デジタル機器の使用が多様になった気がする。またアクティブ・ラーニングを導入の意向の様であるが、造形遊びでは中高学年まで指導が広がった時点で、自然発生的なグループ活動などでは昔から行われていた。[23] これらに目に見える文部科学省の方向転換があると考える。造形遊びはその方向性から小学校よりも幼稚園、保育所等で行われることが多かったように思う。以前なら実際の授業風景を配信するとか、美術教育雑誌のホームページに動画を載せるとか出来たと思う。しかし今は「個人情報保護法」の意識が強く、それも無理だと考える。こうした中、反省を含めて考えるのは造形遊びの普及活動を全くといっていいほどしなかった点である。造形遊びを知る者はのめり込み、知らない一般の教員はいつまでたっても理解できない。

小学校養成校の教員は指導要領をよく読み理解して造形遊びを教えること。[24] そして文部科学省の担当者は今後も造形遊びの有用性を訴えていかないと、図画工作科教育要領の指導項目の最初に記載されても、図画工作科教育の中で消えていってしまう危惧を持っている。

23）前掲書　p. 42「なかなかやるな！」筆者の授業参観評価　これは近年の観察記録であるが、公立小学校赴任時代にも当たり前に行っていた。

24）第51回教育美術・佐武賞の選考委員をしたことがある。佐武賞は審査員の合意で出さなかった。佳作受賞者を二名出した。ともに特別支援学校の実践の論文であった。十数点の論文の中で筆者が注目したのは「教師の遊びなおし」を提言した論文である。子どもの頃行った遊びを再体験する試みで、遊びの面白さを知らないと造形遊びができないという発想からの報告論文であった。知らないものはできないという発想に注目したが、途中賞候補よりもれた。